

# プレーパークの運営と子どもの遊び

—「おかやまプレーパーク」の活動から—

## Management in Play Park and Child's Play The Activity of "Okayama Play Park"

次世代教育学部学級経営学科

筒井 愛知

TSUTSUI, Yoshitomo

Department of Classroom Management

Faculty of Education for Future Generations

**キーワード：**プレーパーク，子どもの遊び，住民参加，NPO，行政との協働

**Abstract：** In the contemporary society, the environment where the child can play freely by his responsibility is indispensable to secure the child's development. Such an environment will become more important in Japan where the mobile phone begins to spread to the child generation. There is a play park in one of the activities that create the play environment. The play park activity that had been introduced from Europe to Japan has come to be going to extend little by little in these 30 years, and for a lot of groups to act on the whole country. The approaches of various shapes were performed in 2000, and a permanent play park "Okayama Play Park" was born in April, 2008 also in Okayama. The cooperation of the resident and the administration is indispensable in above all so that such a play environment is born. The resident built up mutual trust with the administration, and the activity over many years was continued, therefore the birth of the play park was achieved also in Okayama. In this text, I want to look back on the history of the birth of "Okayama Play Park", and to consider the meaning of the resident activity in the play park activity.

**Keywords：** play park, child's play, community participation, NPO, Cooperation with the administration

### I. 現代社会と子どもの遊び

子どもの発達において、「遊び」がとても大きな意義を持っていることは過去の様々な研究で明らかであるが、現代はその遊び体験をする時間も短く、また遊びの種類も多様ではなくなっているなど、子どもの発達環境が脅かされている。その原因は、都市化や核家族化や少子化などの社会の形の変化や、価値観の多様化などの社会の複雑化などがあげられる。とりわけ子どもを取り巻くメディアの問題は、非常に大きいといえるだろう。

この10年間で携帯型のゲーム機は世代交代しますます普及してきている。またここ数年の携帯電話の普及に伴い、小学校の低学年から携帯電話を持つ世代も出

てきていて、遊びだけでなくコミュニケーションまでもが、子どもの生活を一変させようとしている。

現代の日本では屋内が快適であり、保護者にとっても屋内で遊ぶことが安全だと考えられている。このような、幼少期からハイテク機器に触れることが当たり前の時代には、子どもの遊びと発達を保障し子どもが屋外で安全に多様な遊びができるような環境を、以前にも増して意識的に作る必要がある。

遊び場作りの活動は、1970年代から日本各地で行われてきたが、その活動は年々広がっている。これは時代の変化と共に遊び場作りの必要性が高まり、より多くの人の共感を得ているからだろう。

## Ⅱ. プレーパーク

### 1. 歴史

現在のプレーパーク（冒険遊び場）につながる「廃材遊び場」がデンマークに誕生したのは1943年のことであった。それ以来、その考え方はイギリス、ドイツ、スイスなどヨーロッパ各地を中心に広がり、日本には1970年代に初めて紹介された。

日本では、1975年7月、東京都世田谷区経堂の烏山川緑道計画地の一角に、夏休みだけの特別企画、冒険遊び場『こども天国』が開設された。これはある一組の夫婦によって行われた活動だった。イギリスの冒険遊び場にヒントを得たこの遊び場は、77年には場を桜丘に移し、その地域の住民を巻き込み15ヶ月にわたり取り組まれた。

住民によるこの手づくりの遊び場は、子どもから絶大な支持を受け、翌79年、世田谷区は国際児童年の記念事業にこの冒険遊び場を採択。住民と区との協働事業である日本で初めての常設の冒険遊び場、『羽根木プレーパーク』が誕生した。

住民によるこうした主体的な取組みを重視した区はプレーパーク増設の方針を打ち出し、住民の動きを支援。82年には『世田谷プレーパーク』、89年には『駒沢はらっぱプレーパーク』03年には『烏山プレーパーク』が誕生した。

### 2. 特徴

プレーパークとは普通の公園ならば禁止されていることでも、自分の責任で自由に遊ぶことをモットーに、子どもがやりたいと思ったことを実現していく遊び場である。そのために様々な工夫がされているが、禁止事項を極力なくすことの他に、遊びの専門職であるプレーリーダーが常駐していることも大きな特徴である。プレーリーダーは、遊び場を作り出すデザイナーであり、子どもの遊ぶ力を引き出すファシリテーターであり、子どもにとっては遊び仲間であり、保護者にとっては子どもを見守ってくれる存在である。この、モットーとプレーリーダーの存在によって、プレーパークは子どもがのびのびと自由に遊べる遊び場となっているのである。

また、最初の成り立ちからわかるようにプレーパークの活動は住民と行政の協働で行われることも特徴となっている。

### 3. 活動の広がり

1998年には羽根木プレーパークの20周年を記念して、冒険遊び場全国集会在開催され、全国で活動しているプレーパークの運営者やこの活動に興味を持っている人たちのネットワークが作られ、その後2003年のNPO法人日本冒険遊び場づくり協会の設立へとつながっている。

現在全国には、プレーパークを主催する団体が226団体ある。常設のものから不定期のものまで開催形態は様々だが、その数は年々増加している。

## Ⅲ. 岡山における遊び場に関わる活動

### 1. 遊び場調査から一日プレーパークの開催へ

岡山では田中治彦らを中心に公園調査を行っていた市民グループ「子どものための街づくり研究会」が1996年から1997年にかけて、「こんな遊び場が欲しい～住民参加による遊び環境調査マニュアル～」の作成や学区ごとの遊び場マップ作りを実施している。その後別のグループが1999年から遊び場に関する勉強会を開始し、2000年に筆者が代表を務める「子どもの居場所ネットワークBa'p（バップ）おかやま」という団体が発足。プレーパークに関する勉強会や東京からプレーリーダーを招いての講演会などを数多く実施するようになる。

その後プレーパークと同様の趣旨で、2000年10月に筆者らによって岡山市旭操小学校で「一日プレイランド」が実施されたり、2001年には倉敷市で「冒険遊び場を考える会」が発足したりするなど、具体的に活動が行われるようになってきた。これらのグループの活動は、東京からプレーリーダーを招致したり、それぞれの市の公園行政担当者とも連絡を取りながら活動したりすることで、できるだけオリジナルのプレーパークの形を踏襲することを心がけているのが特徴である。

2002年3月には東京からプレーリーダー松田秀太郎氏を招いて、初の本格的な「一日プレーパーク」が浦安総合公園で開催される。このときは、子どもの居場所ネットワークBa'p（バップ）おかやまと、様々な子どもの教育活動で実績のあるNPO法人岡山市子どもセンターとの共催で実施された。開催にあたっては、事前に松田氏によるボランティアの勉強会を実施するなどして、できるだけプレーパーク本来のスタイルに近づくように配慮した。このイベントは3000人を動員する大規模なものであった。以後岡山市市内でのプレー

パーク活動は、岡山市子どもセンターが行っている。岡山市子どもセンターは2002年度と2003年度にそれぞれ3回の一泊プレーパークを開催。2004年度からは毎月のように開催し、期間も2日間や3日間などの連続開催も行っている。2004年度は20日、2005年度は24日と、年間の開催日数も増えていった。

この間定期的にプレーリーダーを招致し、ボランティアの学生のための「養成講座」も開催している。開催場所は、年に一度は浦安総合公園で行い、それ以外は岡山市内の旧出石小学校跡と大供公園とで実施した。

2006年度は大きな試みが行われた。ひとつは開催場所を大供公園から子どもの森へと移したことである。子どもの森は総面積2.6haのかなり広い公園であるが、このうち芝生広場の1600平方メートルを借りて実施することになった。

もうひとつは、夏休み期間に連続13日の開催を試み、常設の可能性を探ったことである。この年の開催日数は35日となった。

連続13日開催するとなると、ボランティアとして参加するスタッフの負担はとて大きい。しかしこの連続開催を経験したスタッフは、常設の意味を新たに見出すことになる。それは、リピーターが増え何回も通ってきてくれる近所の子どもたちや親子連れがいたことや、子どもたちの遊び方・親の子どもへの関わり方が徐々に変化していくのを、日々のプレーパークの中で見られたことなどが大きい。「プレーパークは、単発のイベントとして開催していくのではなく、連続してこそ意味のあるものだ」との思いが運営委員の中にふくらんできたのである。

その後、その思いを形にした「おかやまプレーパークの将来構想案」を作成し、岡山市の公園緑地課、生涯学習課、こども福祉課に提出している。

## 2. 常設プレーパークへ向けての試み

岡山市子どもセンターは2007年度、プレーパークを常設したときのイメージをシミュレーションして問題点などをさぐるために、実験的にさらに長期の開催を試みた。

前年が夏休み中の連続13日間だったので、より日常の遊びに近づけた常設を考えるためにも、5月に1月間開催することとなった。これは連続ではなく月曜火曜を休みとし、週五日間の開催とした。

また、常設となると単なるボランティアだけではなく、プレーリーダーの存在がなくてはならないと考

え、岡山でプレーリーダーを募集し、養成のために東京のプレーパークで研修を受けてもらった。その他にもプレーリーダーの雇用のための予算など様々なことが月に一度の運営会議で話し合われ、5月より連続一ヶ月の開催を行った。

実施したのは5月9日（水）～6月3日（日）（月・火曜日は休み）の合計20日間である。開催時間は10時～17時であった。実施体制は有給のプレーリーダーとおかやまプレーパーク運営委員（17人）による運営委員会のもとで実施。プレーリーダーを遊びのリーダーとし、運営の責任は運営委員が担った。運営委員はボランティアスタッフとして毎日の活動に数名ずつシフトを組んでプレーリーダーをサポートした。筆者は運営委員としてこの活動に参加した。

この間1484名の子どもと984名の大人が訪れた。またのべ157名のスタッフが関わった。この年は連続開催以外の月もプレーパークを毎月3日づつ開催した。連続開催期間中はアンケート調査やスタッフのミーティングを毎週行うなどして評価を行った。その結果、子どもの森で開催することについても週五日間開催することについても、良好であった。

またプレーリーダーが常にいることについては、子どもが安心して遊んでいる様子や、遊具が発展していく様子などから、遊びが魅力的なものになる原動力となっていると評価した。

子どもの遊びの発展については三つの変化が見られた。まず質の変化では、毎日やっていることで、遊びがその場限りのものから、質の高いものになっていった。内容の変化では、別々の遊びが一緒になって新しい遊びになっていった。仲間の変化では、顔見知りの友だちがふえ、一緒に遊び出したり、ひとり遊びから複数になることで遊びのおもしろさが変化していった。これらの様子から日々の活動が子どもの遊びに好影響を与えていることがわかる。（図1）

プレーパークは年齢を問わず人が集う場である。平日は特に乳幼児の親子がたくさん遊びに来る。子どもをのびのびと遊ばせながら、くつろいだりおしゃべりをしたり、親の交流の場にもなっている。また、子どもだけでなく楽しそうに遊んでいる大人の姿もたくさん見られる。『自分の責任で自由に遊ぶ』というモットーのもと、遊び場にいるお互いが「ありのままの気持ちを出せる場」であり、「やりたいという気持ちが尊重される場」であることが、年齢を問わず多くの人がこの遊び場へ集う一番の要因だと思われる。

これらの様子を受けて、運営委員会では、「こども

の森でのプレーパークの常設が、当初予想していた以上に魅力的な活動になるだろう」との思いを強くした。



図1 子どもの遊びの様子

### 3. 常設へ向けての意義と課題

岡山市子どもセンターは、この2007年度の活動をまとめて「岡山プレーパーク活動報告書～1ヶ月連続開催を終えて～」を岡山市に提出している。この中でおかやまプレーパークの意義として、次の点に触れている。

#### (1) 連続開催することの意味

そもそも子どもの遊び場は、もともと日常的な空間である。子どもにとって「遊び」とは、日々の何気ない体験を通じて発達するための原動力であるから、日常になくってはならない要素である。行けば必ずあるということが大きな意味を持っている

また子ども自身が連続的に関わることで、遊び場そのものを変化させていくことが可能となる。

新しい遊びの提案やダイナミックな遊びなど様々な挑戦や、遊び場の長期的なデザインを提案することも可能となる。

#### (2) プレーリーダーがいることの意味

プレーパークは教育・福祉施設といった意味合いが強い。このため子どもや遊びの専門職員

が常駐していることが大きな意味を持つ。

子どもにとっても親にとっても、安全に冒険的で刺激的な遊びをすることが可能であるし、毎日専任スタッフが常駐していることで、よりきめこまかな活動が可能となる。

#### (3) こどもの森でやることの意味～

##### 「こどもの森」の特性

こどもの森は親子連れで遠方から来るものも多いため、より多くの市民に利用してもらえる。管理棟があり、公園全体を管理するスタッフが常駐していて夜間は鍵がかかることも運営しやすい要素である。

また、プレーパークの様々な機能として、次の四つを上げている。

(1) 子どもの居場所…自分を自由に発揮できる場所は何より貴重である。

(2) 子育て支援…親子で訪れて「子どもの遊び」や「子どもの視点」を親が発見することで、普段の子育てのヒントになる。また情報交換も可能である。

(3) 地域の活性化…子どもと関わることを通じて大人が動き、大人同志が関わり、社会全体・街全体が活気づく。

(4) 世代間を繋ぐ場・大人の癒し…「遊び」には世代間を繋ぐ力がある。大人自身も自らを解放することでゆったりした時間を取り戻すことができる。

このように実験的に行われた連続1ヶ月開催で、プレーパークを常設することに向けてよい評価がある一方で、課題も残った。

まず一番大きいのは資金である。助成金や寄付金などを定期的に得るための仕組みが必要である。続いてボランティアスタッフの確保も課題である。おかやまプレーパークの特徴は、プレーリーダー以外にボランティアの大人が毎日数名いることであるため、長期開催するとなるとボランティアの確保は欠かせないからである。

しかしそれらの課題はあるものの、岡山市子どもセンターは2008年度、常設のプレーパーク「おかやまプレーパーク」を開設した。

### 4. おかやまプレーパークの誕生

2008年4月9日、県内初となる常設のプレーパーク「おかやまプレーパーク」が開設された。開設のイベントでは岡山市の関係各課からも職員が訪れた。

現在の運営体制は、プレーリーダー1名と、ボランティアスタッフが数名いて、毎週5日間の開催。ボランティアスタッフは30名程度いる運営委員が交替で務めている。そのほか運営の方針を決める世話人会も発足し、月に一度の会議を開いている。筆者もこのメンバーを務める。財政的には、寄付や助成金を積極的に集め、一年間は開催することが可能となった。公園の使用も数ヶ月単位で更新しながら可能となった。

夏の長期休暇の際は、東京からプレーリーダーを招致して、新しい遊具の作成を行ったり、勉強会なども開催した。

#### Ⅳ. 遊び場作りにおける住民と行政

以上のように、おかやまプレーパークの誕生にいたる流れを見ていくと、遊び場作りにはいくつかの条件が必要になることがわかる。

##### (1) 信念を持って活動し続けるスタッフ

運営委員のメンバーは毎週のように8時間のボランティアに関わっている。またその組織を支える世話人会のメンバーは、運営会議や廃材などの遊びの素材の収集、広報活動や行政との関わりなど、多くの時間と労力をさいている。

これはプレーパークに関わる人に、その活動が社会的に大きな意味があるという信念があるからこそできることである。またそのようなスタッフを増やしていくことも大切である。

##### (2) 先進的な事例を元にした学習

日本では世田谷のプレーパークが先進的な事例として必ずお手本にされる。世田谷でプレーリーダーを経験したことのある人に講習や講演をしてもらったり、世田谷に行って勉強することが、一見手間はかかるようだが、プレーパークのスタイルを踏襲するための近道である。

本を読んだりビデオを見たりして自分たちなりのプレーパーク活動をしている団体も全国にはあるが、子どもにとって魅力的で効果的な遊び場にしていくには、大人の視点で考えるよりは、プレーリーダーの視点を早く身につけることの方が大切である。

日本冒険遊び場づくり協会が誕生したこと背景にはそのあたりの事情もあるものと考えられる。

##### (3) 行政とのパートナーシップ

遊び場を多くの地域に広げていくには、私有地を使うのではなく既存の公園を利用する活動になる。そうすると行政と何らかの関わりを持つことになる。このとき重要なのは、要求団体になるのではなく、協働する姿勢であると考えられる。行政にとっても、公園が住民の手でよりよく利用されるのであれば、それは歓迎すべきことであるからである。

おかやまプレーパークの場合、定期的に岡山市の関係各課を訪問して意見交換をしたり、報告書を提出したり、何か問題がある場合も行政との連携をとることで信頼関係が生まれ、長期間の開催を実現している。

##### (4) 資金

常勤のプレーリーダーを雇用したり、素材や工具などの資材の購入には資金が必要である。年間数百万の資金をどのようにして調達するかは、全国のプレーパークが共通に抱えている問題である。助成金、行政からの補助、寄付金などを集めるためには、広報活動なども必要となる。多くの人の理解を得ることで、より多くの寄付などが集まり、持続的な活動となるであろう。

#### Ⅴ. おわりに

岡山の遊び場作りの活動に関わって十年以上がたつが、子どもを取り巻く遊び環境は今後ますます悪化することが予想される。ハイテク環境に負けない人を育てるためには、豊かに遊ぶことのできる子ども時代を保障することが何より大切である。そのためのひとつの方法が、スタッフのいる遊び場の充実である。今後おかやまプレーパークが安定して活動を続け、各地域へプレーパーク活動が広がっていくことを願う。

#### 参考・引用文献・資料

- 遊びの価値と安全を考える会編 (1998)『もっと自由な遊び場を』 大月書店
- 大村璋子 (2000)『“自分の責任で自由に遊ぶ” 遊び場づくりハンドブック』 ぎょうせい
- 岡山市子どもセンター (2006)『おかやまプレーパークの将来構想案』 岡山市子どもセンター
- 岡山市子どもセンター (2007)『岡山プレーパーク活動報告書～1ヶ月連続開催を終えて～』 岡山市子どもセンター

加賀谷真由美 (2001)『子どもとつくる遊び場とまち』  
萌文社

子どものための街づくり研究会 (1996)『こんな遊び場  
が欲しい～住民参加による遊び環境調査マニュアル  
～』

田中治彦・筒井愛知 (1997)「住民参加による子どもの  
遊び環境調査～岡山市3学区における実践より～」  
子ども社会研究3号pp71-83

筒井愛知「子ども・若者の遊びの空間」(2001) 田中治  
彦編著『子ども・若者の居場所の構想～「教育」か  
「らかかわりの場」へ』 pp109-129 学陽書房

筒井愛知「子ども・若者とメディア」(2001) 田中治彦  
編著『子ども・若者の居場所の構想～「教育」か「ら  
かかわりの場」へ』 pp130-153 学陽書房

モバイル・コンテンツ・フォーラム監修 (2007)『ケー  
タイ白書2008』 インプレスR&D

NPO法人日本冒険遊び場づくり協会ホームページ

<http://www.ipa-japan.org/asobiba/>

NPO法人プレーパークせたがやホームページ

<http://www.playpark.jp/>

(追記)

この論文の校正中の2008年12月23日、日本に初めて  
プレーパークを紹介し、活動を続けてこられた大村璋  
子さんがお亡くなりになりました。大村夫妻が日本に  
蒔いた種は全国へ広がり、さまざまな形の遊び場活動  
へと発展してきました。

筆者も、ヘルシンキで1996年に行われた、IPAの第  
13回世界大会や、1998年に名古屋で行われた、IPAア  
ジア・太平洋地域交流集会でお会いして、色々とお話  
をしたのを覚えています。謹んでご冥福をお祈りしま  
す。

(平成20年11月27日受理)